

【受験生へ】小論文入試への取り組み方② ～ 譲歩の構文を使用して ～

国語科主任 八木

ある有名な作家が「芸術とは何か」という問いに対して、「フォルム（型）」である、と言いついていました。たとえば、「短歌・俳句」といった伝統的な文芸作品にも「フォルム」（五・七・五・七・七、五・七・五という定型）はあります。「茶道・華道」もわかりです。クラシック音楽にもソナタ形式（主題の提示部 → 展開部 → 再現部）……。

もちろん、あまりにも型にはまった芸術作品は、感動を呼び起こすことができないというのも事実でしょう。しかし、型にはまった作品はそれだけで、ある一定の鑑賞に堪えられる、というのもまた疑いようもない事実なのです。それは、「フォルム（型）」が作品内容・形式に制約を与える代わりに、作品そのものに力も与えるのです。「フォルム（型）」には歴史の試練に耐えて生き残ってきた結果得られた普遍的な力が内在しているのです。

そうです、今、私が使用したのがいわゆる「譲歩の構文」です。

「もちろん（譲歩の接続語）、A、しかし（逆接の接続語）、B。」

Aの内容 = 一般論 定説 表面的 消極的評価

Bの内容 = 自論 自説 本質的 積極的評価

*譲歩の接続語には、他に「たしかに、なるほど、もつとも」などがある。

いきなり、自論を展開するのではなく、まずは、一般論を紹介し、その上で、「しかし、実は…」とした方が、説得力が増すのです。一般論をまずは紹介して、読み手の共感を得つつ、議論に引き込んでおいて、「しかし、実は…」と自論を持ち出して、一般論との違いを際立たせ、読み手に印象付けます。ボクシングにおけるカウンターパンチ（相手のパンチをはずして急に反撃を加えること。相手の体重が前足にかかっているため、反撃すると本来のパンチ以上のダメージを与えることができる）のようなものです。

すべてをオリジナルな内容にすることは大変です。また、独善的な自論の展開に陥る危険性もあります。定説の上に、自説を展開するというのは小論文の客観性を維持するためにも必要なことなのです。